

地フィールド調査の結果を適宜盛り込み、特に商店密度の高い地区と低い地区に着目した。

また、第5節の消費者調査分析では、中野区が行なったアンケート調査の資料を元に、その中から地域商店街の利用状況と、買い物環境に対する消費者の要望事項を取り上げ、これにフィールド調査の結果をからませた。

(3)研究の結果

中野区は、23区の中で都心への交通至便な住宅地区にある。このため、都心へ勤めに出る若年層の単身世帯が大変多く、区民の定住性は、他区と比較してやや低目の結果が出ている。こうしたことは、中野区の持ち家率の低さ、つまり、アパート数の多さ、及び、人口移動の激しさの面にも如実に現われている。

また、中野区の人口密度は23区中、豊島区に次いで第2位であるが、これは、区内に大規模なオープンスペースが無いことが原因である。なお、中野区内を地域的に見ると、区の北部は南部と違って人口密度が低く、新青梅街道以北の練馬区寄りの地区では、人口増加が続き、それ以南では人口減少状態が続いている。つまり、区の南部と北部では、かなり様相を異にしていると言える。

次に、商業については、中野区が住宅地であり、しかも隣接して新宿副都心が存在するため、その規模は大変小さい。したがって、中野区の商業全体には際立った特色はないが、区内の個々の地域を見れば、それぞれ独特の商店街が形成されている。区の北部には最寄り品中心の駅前型商店街が多いのに対し、区南部には、歴史の古い街道沿いの商店街や、安価性が売り物である住宅近隣型商店街などである。また、中野駅北口には買い回り品中心のショッピングセンターが形成されている。しかし、中野区全体を見れば、最寄りの品中心の、住宅生活に密着した商店街が圧倒的多数を占め、ここにも「住宅地中野」の姿が現われている。

岐阜市の衣服産業について

—国鉄岐阜駅前の繊維問屋街を中心として—

深尾博子

岐阜市は県庁所在地として岐阜県全体の中核機能をもった都市ではあるのだが、衣服製造卸売業の特化が見立ち、他の日本の都市と異なり製造業部門の発展が著しい。政治都市は大抵の場合工業の発展が見られないのだが、この意味では岐阜市は異例だと言えよう。また、岐阜市の既製服産業は製造面においても卸売面においても、全国でも有数の産地にまで進展しているのだが、単なる一地方都市にすぎない岐阜市がいつ頃から、どうしてここまで成長させることができたのかを究明したく思いフィールドを決定した。

調査方法としては、フィールドでの実際的な調査は夏休みなどの長期休暇に行ない、現地へ赴けない間は統計や論文調査に当てることにした。

フィールドワークでは業者の生の声を聞くことに主体を置く積りであったのだが、問屋街の中はい

つも騒然としており、また従業員の方も忙しく立ち働いていらっしゃるため思うように話を聞けなかった。そこで、問屋業者で組織されている既製服産業組合に行き、現状を教えて頂いた。また、この問屋街業者へのアンケートは地元の商業高校や銀行、組合などによって予想以上に頻繁になされていたためにこれを利用することにした。

衣服産業は近年注目され始めた部門であるため論文や出版物が少なく、またこの問屋街についての論文も、衣服産業が岐阜市の基幹産業であるにもかかわらず少なかつたため苦慮したが、岐阜大学の先生方に御相談したところ親切に指導して下さり大いに助かりました。

統計は、商業統計表、工業統計表、事業所統計表などによったのだが、東京や大阪などの明治時代から衣服産業が盛んな産地にははるかに及ばないながらも、岐阜市の衣服・その他の繊維製品の事業所数、従業者数、製造品出荷額は全国の上位に位置しており、統計的にも岐阜市の既製服産業の隆盛の程が立証できた。

この問屋街が始まったのは終戦直後と歴史的には非常に浅いため、技術やデザイン力の立ち遅れが目立ち、比較的技術の容易な婦人服やスポーツウェア、学生服などに主体を置いており、紳士服の取り扱いは少ない。発展要因としては、国鉄岐阜駅前に業者が集積しており、また古くからの毛織物産地である一宮、尾西に近接して仕入れに有利だったこと、地方都市であるため大都市に比べると安い労働力の入手が容易だったこと、小規模故に大衆化、ファッション化などへの体制改善が機敏に行なえたことなどが考えられる。

しかし、発展途上国からの安い衣料の輸入が盛んな近年では、従来の安価製品であるだけの特質に頼りきらず、岐阜産地の新たなセールスポイントを開拓していくことが今後の大きな課題だと言えよう。

大垣市の都市機能

福田弘子

(1) 目的

岐阜県大垣市は、濃尾平野西部に位置し、西濃と呼ばれる地域にあり、県下では岐阜市に次いで人口の多い都市である。この都市が現在どのような機能をもって存在するのかを明らかにすることがこの論文の目的である。

(2) 研究の枠組

第一章では、大垣市の自然、特に水について触れ、また城下町大垣の歴史を述べた。

第二章では、大垣市の都市圏と題し、行政、通勤通学者数、商圏の3つの点から分析した。

第三章では、近代工業都市としての大垣市を、繊維工業の動向を中心に明らかにした。

(3) 結果

大垣市は江戸時代戸田10万石の城下町として発展していた。当時現在の県庁所在地岐阜市にある岐阜城には城主がなかったから、行政の中心において大垣は県下第一であったと言える。明治維新によ